

人を楽しませる価値観、楽観性の提案

サブタイトル (10.5 ポイント)

須賀えり子 杉山崇

(株式会社A i ・フィールド) (神奈川大学人間科学部)

【問題】

E. シャイン (金井訳, 2003) は価値を見出す生き方の個人差として8つの価値観を提案した。8つの価値観は翻訳によって多少の訳語が異なっているが、概ね自律性、創造性、安定志向、挑戦好き、暮らし、専門性、管理職 (組織性)、貢献意欲の8つとされている。

しかし、近年はダイバシティの時代と呼ばれ価値観の多様化も指摘されている。シャインの提案する価値観では考察できない生き方も出ている可能性が考えられる。

たとえば、ブロガー、YouTuber など人を楽しませるコンテンツを発信する生き方を選ぶ人たちの存在が注目されるようになって久しい。彼らの人を楽しませる生き方を説明できるシャインの示唆した8つの価値観には含まれていない。このように、シャインの示唆した8つの価値観を超える生き方が現れていると言えるだろう。

【目的】

以上のことから本研究ではシャインの示唆した8つの価値観を見直す必要の有無について、人を楽しませる価値観の存在を通して検討したい。この生き方に注目する意義としては、このような生き方を選ぶ人々が社会的に注目される事が増えたことによる。

たとえば、小学生が憧れる職業の第1位がYoutuberであるというニュース (学研ホールディングス 2019 年度版小学生の「将来就きたい職業ランキング」) が話題になったこともある。ブロガーとして有名なイケダハヤト氏は著述家・文化人としても注目され、イケダハヤト氏の言動や動向に影響される人も少なくない。このように人を楽しませる価値観を持つ人の社会的影響力が高まりつつある中で、この価値観について検討することに意義があることと言えるだろう。

そこで、本研究では人を楽しませる価値観を「楽観性」として定義し検討することを目的とする。楽観性とは心理学の文脈ではクヨクヨせずに物事を楽天的に考える傾向を表す用語として用いられることが多いが、人を楽しませるにはまず自分自身が楽しんでいなければならないこと、人の気持ちを楽にさせること、などを考慮して、本研究ではこの用語で定義した。

【方法】

研究参加に同意した第1筆者が関係する研修参加者

および取引先企業の従業員 210 名 (男性 109 名、女性 101 名; 20 代—60 代) を対象に Web による調査を実施。第1筆者がシャインの8つの価値観の概念に基づいて作成した項目 (自律 13、創造性 10、安定志向 10、挑戦好き 9、暮らし 9、専門性 12、管理職 11、貢献意欲 10) および楽観性を表す 12 項目について、第2筆者 (心理学研究歴 27 年、1 級キャリアコンサルティング技能士) がエキスパートレビューを行い、概念を検討の上で修正を加えて暫定的な価値観尺度を作成した。項目はすべて各価値観を代表するキーワード (たとえば、貢献意欲では「世界人類の幸福」、専門性では「専門性を活かす」、楽観性では「笑顔を生み出す」など) について、「…は、あなたの生き方として大切な価値観ですか?」と問いかけ、「大切である (5)」から「大切でない (1)」までの5件法で回答を求めた。

調査では各価値観と社会適応の関係を検討するために被受容感・被拒絶感 (杉山・坂本, 2006)、甘えの断念 (杉山・坂本, 2001)、抑うつ感 (杉山, 2018) も測定した。なお、対象者の負担を考慮して各2項目からなる短縮版を構成して活用している。先行研究によるとこれらの尺度の信頼性係数 (α 係数) はかなり高く、2項目のピックアップであっても一定の信頼性を担保できると考えられる。

【結果と考察】

価値観を表す全項目について因子数を検討するために因子分析におけるスクリーを算出した。Table1 にその結果を示す。

	固有値	累積寄与
Factor1	25.381	26.166
Factor2	9.123	35.572
Factor3	5.338	41.075
Factor4	4.248	45.454
Factor5	3.769	49.340
Factor6	3.013	52.446
Factor7	2.408	54.928
Factor8	2.240	57.237
Factor9	2.136	59.439
Factor10	1.887	61.384
Factor11	1.719	63.157
Factor12	1.528	64.732
Factor13	1.361	66.135

Table1 因子分析スクリー

因子分析における因子数の決定は、ガットマン基準: 固有値が1以上の因子を採用する、スクリー基準: 固有値の大きさをプロットし、推移がなだらかになる

前までを抽出する、寄与率が 50~60%以上になる因子数を採用する、解釈が可能な因子構造を採用する、などが主な方法であるが、近年ではガットマン基準の適切性には疑問が持たれている。本研究でも Table1 では割愛しているが 19 もの因子に分けるように示唆されてしまう。そこで、スクリー基準を検討するためにスクリープロットを作成した (Figure1)

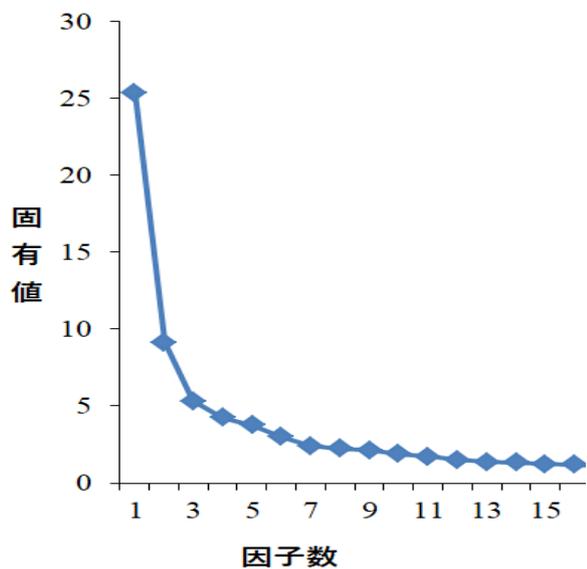


Figure1: スクリープロット

4 因子以降で一旦傾斜がなだらかになるものの、9 を境に相対的に大きく下がり 10 以降で再び傾斜がなだらかになる傾向が読み取れる。累積寄与率では 59 台を示し、寄与率を考慮した基準にも合致している。そこで、本研究では 9 因子と解釈して以下の分析を進めた。

因子分析は、参加者 210 名に対して価値観を表す項目数が 100 近い為、すべての項目に同時に因子分析を行う方法ではなく、各価値観を表す項目群ごとに主因子法を用いて 1 因子性、すなわち信頼性を検討する形で行った。その結果、すべての項目が当該因子に、.36 以上の因子寄与率を持っていたため、本研究ではすべての項目を採用して以降の分析を行った。信頼性係数は、 $\alpha = .842 \sim .954$ と相対的に高く、各価値観の尺度は一定の信頼性を備えていると言えるだろう。

楽観性と各価値観の関係を検討するために相関分析を行った (Table2)。楽観性は各価値観と有意または有意傾向の相関関係にあるが、最も高いものでも $R = .618$ (暮らし) と中程度の相関である。これは他の価値観とは別の概念であることを示唆するものであり、9 番目の価値観である可能性を示唆する結果であると言える。

次に各種適応指標との関連を検討した (Table3)。抑うつ感重視している価値観が満たされているか

どうかに関与するため、ほとんどの価値観で価値観単独での関連はみられていないが、楽観性は他者から大切にされているという認識と情緒である被受容感と正の関係、他者から蔑ろにされているという認識と情緒である被拒絶感と負の関係にあることが示唆された。被受容感も被拒絶感も抑うつとの関連が繰り返し確認されているので、楽観性を持ち、人を楽しませようとする人は間接的に抑うつ的ににくい可能性が示唆される。同様の傾向を示す価値観は本研究では管理職と挑戦好きだけであり、概念的にも他の価値観とは違うことが示唆されていることも合わせて、新しい価値観として検討する意義があると考えられる。

	楽観性	貢献意欲	管理職	専門性	暮らし	挑戦好き	安定志向	創造性
貢献意欲	.518**	1.000						
管理職	.473**	.339**	1.000					
専門性	.442**	.392**	.383**	1.000				
暮らし	.618**	.454**	.310**	.497**	1.000			
挑戦好き	.511**	.449**	.612**	.456**	.300**	1.000		
安定志向	.273**	.319**	.153*	.185**	.515**	-.035	1.000	
創造性	.437**	.333**	.581**	.400**	.238**	.678**	-.003	1.000
自律	.519**	.366**	.675**	.384**	.365**	.636**	.107	.579**

Table2: 各価値観の相関分析

	楽観性	貢献意欲	管理職	専門性	暮らし	挑戦好き	安定志向	創造性	自律
甘えの断念	-.043	.021	-.143*	.003	.111	-.154*	.205**	-.078	.035
抑うつ感	-.041	.143*	-.077	-.033	.047	-.091	.237**	-.079	-.025
被拒絶感	-.223**	.008	-.175*	.015	.001	-.186**	.208**	-.118*	-.137*
被受容感	.422**	.160*	.349**	.130*	.200**	.362**	-.110	.297**	.378**

Table3: 各種適応指標との関連

本研究では男女差の分析や構造方程式モデリングによる解析などが行われていらず、何より新たに作成した価値観尺度の妥当性の検討も不十分である。そのため、さらなる検討が必要と言えるだろう。

【文献】

杉山崇・坂本真士 (2006) 抑うつと対人関係要因の研究: 被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつ的自己認知過程の検討, 健康心理学研究, 19 (2), 1-10.
 杉山 崇・坂本真士 (2001) 被受容信念の概念化および測定尺度の作成とその抑うつ過程の検討 日本健康心理学会第 14 回大会発表論文集.
 杉山崇 (2018) 心理学研究におけるパラノイア感・抑うつ感の定義と測定尺度の作成, 心理相談研究, (9), 1-11.

<キーワード>: E.シャイン、価値観、楽観性